長谷川伸全集

第六巻

長谷川伸全集

第六巻

上杉太平記　国姓爺　飛黄大船主

朝日新聞社

長谷川伸全集　第六巻
上杉太平記　ほか
全十六巻・第十三回配本
一二〇〇円

昭和四十七年三月十五日発行
著者　長谷川伸
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

装幀　原弘
帯挿画　岩田専太郎

©SHINYOKAI 1972

0393-240106-0042

長谷川伸全集　第六巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

上杉太平記　五
国姓爺　飛黄大船主　一三五
解説　村上元三　四三五

上杉太平記

昭和十四年四月―同十五年三月　『大衆文芸』連載

吉良上野介義央

一

吉良上野介義央が起ちあがりそうな恰好までして、
「桜田からの使いか。待っていた待っていた。早速これへこれへ」
と、取次のものの背中を推しやるように、せかせかといったあとで、さて自分は、いったんあげた腰を分厚い褥に据えなおし、脇息に肘を軽くかけて眼をとじた。典礼師範の家で四千石の俸禄を食む高家筆頭の上野介は、だれの眼もない江戸鍛冶橋内の拝領屋敷の居室にくつろいでいる、今も又、絵にしても立派な構図を、骨折らずにとれる男である。

が、青畳にむけた上野介の眼は陰惨だった、暗い陰が顔に隈をとっている。一文字口がきッと咬まれている。こういう影と日向のある顔は正当でない。重大な事件に関係しているものに多い。

その時は寛文四年閏五月六日の午後で——播州赤穂浪人大石内蔵助以下が討入りをした元禄十五年十二月十四日から溯って三十九年以前で、上野介の壮んな時代である。

廊下に衣摺れの音と慎み深くはこぶ足音がしたので上野介は顔つきを更めた。今までの陰惨が曇りなく掻き消え、温和な老成したような、だれにでも親しまれそうな顔にぬけぬけと変った。

近侍の案内で畏る畏るはいってきた桜田の上杉家の士は上野介の顔をろくに見もせず、「うへえ」といってひれ伏した。

上野介は目を細くした。象の眼のように優しくなるのを知っているからである。口をすこし開いた、親切な言葉が咽喉まで来て待合わせているらしく見えるからである。

「播磨殿には、さだめし幾分なりと御快方に向わせられたであろうな」

「は——」

曇った声を畳にむけて使いは微かに咽んだ。

「お悪いか、それはそれは——ふうむ」

と、上野介は眼をつむった。

使いは報告が口に出ない、これではならぬと自制しているらしいが、悲しみの波が体を打って言葉が舌へのぼってこないらしい。

上野介は瞑目の裡から使いの肩衣をそッと眺めていたが、

「悲嘆はさることながら、口上があろう」

と、威厳を持たせて尋ねた。

「はッ。取乱し恐れ入り奉ります」

「叱りはせぬ。播磨殿ご容態は、何とある」

「はッ」

使いは泣き顔を伏せ口籠っている、云おう云おうとするのに云えないらしい。

上野介はそれを見てさてこそいよいよ〝彼は死亡した〟と思った。にッと唇が思わず綻びかけるのを抑えつけ粛然として、

「播磨殿ご容態は」

と、膝を叩いてその音を使いの気付に与えた。音の効力は使いにだけでなく上野介にも効き目があった。上野介の面色は膝の音とともにさッと冴え、溢れるごとき気力が出た。

使いは膝の音に刺戟され、それからそれと報告が滑かに舌に乗って出た。報告の言葉は滑かだが顔は青ざめている、眼の底から頬へはみ出してくる涙は二滴三滴ではない。報告が全部終った時その頬は涙のあとでぴかぴかしていた。

使いは上野介の慰撫の言葉二ツ三ツに身ぶるいまでして感動し、来た時とおなじ悲しげな様子で急いで帰って行った。

上野介は独りになると抑えきれない愉快さにツイ声を出して笑いかけた。大願成就がいよいよ出来るのである。上野介はきらりと光る眼をして笑いを咬んだが、ついに抑えきれなくなり、声を低く締めつけてククと暫く笑った。

吉良上野介義央は三十万石の上杉家をそッくり、我が家の手の内に納めようとして先ごろから手段をひそかにめぐらしていたのである。

それは——。寛文四年閏五月朔日、江戸城へ登って退出し桜田の屋敷へ帰って晩餐をとった上杉播磨守綱勝が、その夜中に急に苦しみ出した。綱勝は米沢三十万石の城主で、従四位下侍従、年は二十七——このことだった。

宿直の医師有壁道是が薬をすすめたが効がない。夜明けまでに綱勝は七、八回も吐瀉した。道是は狼狽して手を尽してみたが綱勝の苦しみは治まらなかった。二日の晩から道是と交代して内田玄勝が治療にあたったが、やはり効果がない、綱勝はますます衰弱した。四日の晩から医者が又交代して井上玄哲が手を尽したが、これも又その効がない、鍼医の山下友仙が召されて鍼治を試みたが、これも効き目がない。吐瀉は連日で、そのたびに憔悴が加わった。六日の昼、ようやく便通が三回にとまったが症状は甚だ悪く、脈のごときは辛うじて打っているに過ぎない。こうなっては神仏による奇蹟でもあればとにかく、百人の名医の力でも回春の途のない全くの絶望に陥った。上杉家の使いが四方に飛んだ。親族縁戚がなかなか多い、そのなかで、会津若松二十三万石の城主保科肥後守正之のところへ第一番に使いが飛んだ。肥後守正之の女が綱勝の夫人であっただけでなく、正之の人物が、綱勝のみならず、江戸米沢双方の家来中に信望があったからである。

吉良上野介義央も上杉家とは縁が深かった。綱勝の妹が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

上野介の夫人で、万治元年十二月輿入れして足掛け六年目に男子を生んだ。幼名を三郎という。三郎という名を吉良家では尚(たかと)んでいる。

綱勝の生母の生善院(しょうぜんいん)が斎藤という自分の家を興させるために吉良家から三郎を養子にもらい、今年二歳になったのを米沢で育てている。そういう二重の縁が結ばれている吉良家であったが、二番三番という使いが飛んで行ったのではなく、順番はもっと奥であった。それというのが上杉家中に、上野介義央よりも上野介の父若狭守義冬(よしふゆ)という老いてますます面白からざる人に、反感をもつものが尠(すくな)くなかったからである。

綱勝は奇蹟の恵みに浴しえなかった。五月朔日の発病から六日目の夜中に手足が冷たくなり、脈が不整になった。来るべきものは死の他にない。

(一) 保科肥後守正之は徳川(二代)秀忠の第三子で三代将軍家光の弟である。秀忠は江州浅井家からきた夫人を懼(おそ)れて子とせず、ゆえに正之は母お静の父神尾の家に生れ、一時、武田見性院尼に養われて武田を名乗った。見性院尼は家康の妾で甲州穴山氏の女(むすめ)おつまの方である。後に正之は信州高遠城主保科肥後守正光(まさみつ)に養われて三万石の高遠城主となり、羽州山形二十万石の城主となり、転じて会津二十三万石の城主となり、兄家光の他界後、四代将軍家綱を輔佐したること十年、寛文九年致仕し、同十二年十二月十八日卒す。年六十二。会津松平家の祖にして名君であった。水戸の義公(光圀)、備前の芳烈公(新太郎少将光正)と併せて天下の三公という。

二

芝新橋五丁目海手の保科肥後守正之の屋敷の正門が、夜明けにはまだ浅い頃、さっと開いて、一群の乗馬の士を吐き出した。約二十人の騎士の半ばは並び九曜星の馬乗り提灯をもって前方と側方とにある、無燈の騎士は列の真ン中で駿馬に跨がっている年五十四、五ぐらい、気品の高い武士の護衛についている。

夏の朝の爽かな風がそよそよと吹いている、沿道の街の家は、ごく稀(まれ)にしかまだ起き出でていない。

この一群は桜田さして急いだ。桜田が近くなると一騎が駈抜けて外桜田濠通り上杉播磨守綱勝の屋敷へ向った。上杉邸では門を開いて物見(ものみ)を出し先触(さきぶ)れを待っていた。

「お着きお着き」

上杉家の表玄関に燭台が幾つも持出され、江戸家老千坂兵部、沢根伊右衛門が出迎えた。肥後守正之が、ほどなく玄関におり立った。良き政治家でもあったが学者でもあった正之は威徳がおのずとあった。

客間に案内された肥後守はやがて病室を見舞った。綱勝は意識がなくなっている。

暗涙をのんで、じッと綱勝の死相の出ている顔を見詰め

ていた肥後守が、
「兵部」
「は」
「伊右衛門」
「は」
「談ずることがある。参れ」
「は」
客間に再びはいった肥後守は四方の戸を悉く外させ、話声の聞きとれぬ遠方に人を立たせた。
しらじらと明け初めた。蟬、よしきりが何処かで鳴いている。
「兵部。国許の様子はどうかな」
「人心きわめて動揺いたしおります」
「もっとものこと」
「家中挙って憤激いたしております」
「云うな、それは。して、江戸はどうかな」
「同様にござります」
「もっとものこと――が、それではならぬと存じているであろうな、両人」
「……」
綱勝に実子がない、二十七歳の若さで壮健な日頃だったので、いずれ世嗣が生れることと家中のものは安心していた。もとより養子をしていない、仮養子のテも用いてなかった。幕府は〝嗣ナキハ絶ツ〟である。上杉家は不幸にして家断絶の条件を備えていたのである。
上杉家は黄門景勝の雄図やぶれて徳川家康に屈伏し、会津仙道百二十万石を羽州米沢三十万石に削封されて今日に及んでも大小の諸士およそ六千人である。この人々が秩禄を失うだろうことを考える前に、もう一ツのことがある。それは吉良上野介義央が実子三郎をして上杉家を嗣がせんと企んでいるという疑いである。
（御屋形には毒害にあわれ給うたのである）
と、いう声が国で拡がった。信じもしている。肥後守は、それらの一々を悉く知っている、が、言葉を和げて、
「両人。家への忠義専一であるぞ、家への忠節である。播磨殿へのみの忠義では足らぬ、上杉の家への忠義」
「何と、仰せにござります」
「よく聞けよ。正之、今日、お城へのぼり、御老中へご相談を仕ろう。それは、他ならぬ、上杉家名跡永続のこと――六千の将士の身の上も案じられる」
名跡を立てるにしても綱勝には実子がなく養子もない、それではだれを世嗣に立てようと考えているのか、千坂兵部にも沢根伊右衛門にも推定ができない。
肥後守は二人の顔を見詰めていった。
「上杉名跡は三郎殿ぞ」
愕然として兵部と伊右衛門は顔見合せた。
三郎は二歳、幼いのはこの場合すこしも問題でないが、上野介の長男であることが問題である。人もあろうに上野

介の実子では主君と仰ぐこと、心外の至りである。
「三郎は綱勝の甥にして生善院殿ご養子なれば、そち達に異議はないはず」
兵部も伊右衛門も、断然、首を横に振った。肥後守はそれを知らざるごとく、
「何やらん風聞はある、予も耳にした。風聞は風聞と聞けよ。風聞に根をもつな。それよりは上杉歴代の赫々たる武名を失わぬが第一ではないか。家中大小の諸士六千人に知行扶持を失わせてはなるまいではないか」
「……」
「午の刻までには使いを遣わす、よって、国許へ、使いの口上聞き次第、しかるべきものを遣わし、まず以て人心の動揺を取鎮めい」
兵部は伊右衛門と事毎に顔見合せていたが、このとき、決然、所信を披瀝しようとして、
「申上げます」
「いやいや正之に任せい。正之が猫になろうでないか。肥後かく在る限り、何処の鼠をか上杉の家に入らすべき。正之、請込んだぞ」
さッと肥後守が起ったのが、兵部に二の句をつがせる余裕を与えなかった。
すッかり朝になっていた。日が赫々と照りそめている。蟬のなく音が高い。
肥後守を見送った兵部と伊右衛門は、人のいない客間へ来て、黙りあって蹲踞るように坐った。
やがて、兵部が陰気な声で、
「何とするかな」
と、長い息をついた。伊右衛門の咬んでいた唇に歯型が残っている。
「何としようもない――いや、ある、ただ一ツ」
「何が」
「復讐よ、上野介殿の鼻明かしてやる復讐よ」
「ふうン、そうか」
「お判りですかな」
「判らぬでもないな」
「上野介殿を刺しまいらすのではない」
「そうとも、それではならぬことだ」
「三郎殿のことでもない」
「そうとも、それであっては、なおさら相成らぬ」
「その他のこと。お判りかな兵部殿」
「判らぬでもないな」
「それがし一存の出遮張りでやってみる。外れて、末代醜名を残すとなれば、それがし一名だけの醜名に止め、兵部殿のご相伴は固くお断りいたす」
「いやいや、それはその時次第。只今から打合せには及ばぬ」
その後、二人は一言も口をきかず、眼を伏せて廊下へ別に出た。

午の刻――今の正午までにと肥後守がいったとおり、肥後守の家老田中三郎兵衛が上杉家へ来て、

「御老中にご相談をなされしところ、御老中お請込みにつき安心あるべし。また、国表へは家臣一人を下し、この旨を伝え取鎮めよ、くれぐれも軽率妄動を戒めよ、誤って天下の大事を惹き起すな――」

と、肥後守の意を伝えた。

その晩、綱勝が卯の刻、今の午後六時に卒した。家臣の来次長右衛門が翌八日の未明に、早馬でその知らせに米沢さして下った。

三

上杉家へ老中から見舞いの使者が遣わされた。

使者は上杉家から先程差しいだした、綱勝死去の届書を知らぬ気に、病気見舞いをいった。

と、千坂兵部が慇懃に、見舞いの礼をいっている横で、言葉の句切りを待っていた沢根伊右衛門が、

「主人播磨守儀、昨夜卯の刻、卒しましてござります」

と、声高にいった。兵部は黙っていわせておいた。

使者はどきりとした顔をして、

「何を申さるるか」

と、叱りつけ暫くして苦笑いをした。

「主人播磨守儀、昨夜卯の刻」

再び伊右衛門がいいかけると使者は横を向いて、

「暑気甚だしいときは耳鳴りがいたして不自由いたす、方方にはさようのお患いござらぬか」

と、題目を露骨に外し、〝重ねて主人死去のことを申すな〟と諷した。

見舞いの使者が去ったあとに、綱勝の死亡届書が残っていた。使者がわざと棄てて行ったのである。

程経て保科家の田中三郎兵衛がきて兵部と伊右衛門に面会を求めた。二人は手首に数珠をかけ、田中を客間に案内した。

田中は二人の手首に数珠をちらと見て、座が定まると、

「早速ながらご両所にご無心がござる」

伊右衛門がすぐさま答えた。

「何事か存じませぬが、ご覧のごとく、主人綱勝、きのう卯の刻に卒しまして、何かと混雑、ご無礼お許し願いとうござる」

「手前ご無心がござる」

と、田中は伊右衛門の言葉に、おっかぶせて又いった。

「その数珠二連とも、肥後守にお預けください」

「せっかくながらその儀は、ひらに」

と、兵部が会釈した。田中は、むッとして、

「何とあって」

「家来として無念骨髄に徹し」

と、兵部がいうそのあとを引取って伊右衛門が、

「田中殿お聞き願います。肥後守様にはご存じか否かは存

じあげませぬが、綱勝の卒しましたるは病気でござらぬ」
「それを云われてはなるまい」
「いやお聞き下さい。主人綱勝は、ある人のために毒害されたのでござります。その証拠はご遺骸をご覧くだされば明白でござる、御身体はもとより、手足へかけて紫斑のあらわれましたることが第一、それは病死といえど、さることありと、あるいは説を為すことも出来ましょうが、医師のものが毒害といいきりおります。これ動かし難きことにござります。しかし、無念なるは毒害が何者の所為か相知れませぬ、とは申せ、いかなる人が、お指図なされたか、その辺はほぼ判然いたしおります」
「よろしい。そこまで申さるるなら、田中三郎兵衛、いっさいを承りおきましょう」
「そう願えればこの上なし。綱勝毒害と知るや、江戸はもとより国表の家来、一同に、容易ならぬ計画を立ててござる」
「それは」
「毒害指図の人にお恨み申上ぐるということでござる」
「首尾よく参りますかな、只今の御代に」
「さ、それは何とも申されませぬ」
「して、その相手の人とは」
「吉良上野介殿」
「なるほどな」
と、田中が首肯いた、と、見て兵部が、
「なるほどと仰せあるか田中殿」
「肥後守家老田中三郎兵衛では、なるほどとはなかなか申されぬが、一個の田中三郎兵衛としては一応のところ、なるほどと申しましょうな」
伊右衛門が一膝乗り出し、
「まずお聞き下され田中殿。綱勝卒して世子がござらぬ、肥後守様御申聞けの三郎殿をお世嗣とするは、上杉名跡を立てまするには此上なき儀にござりますが、飜って考うるに、それにては上野介殿の術中にはまりこむと申すものでござる。江戸家老ども以下はそれにて納得仕るとも、国侍数多は必ずそれにては納得仕りませぬ、おそらくは、徒党をくんで江戸へのぼり、機を見て上野介殿お屋敷へ乱入し御首級をいただくか、又は下城を待って道路において刺し殺し、綱勝の怨みをはらすか、この二ツより出でまいと存じます。これを防ぐには御家安泰とだけでは覚束なきことにござります。よって、それがし一己の考えにて、上席たる千坂兵部を差置き、主人綱勝、昨日卒したりと御公儀へ届書を差し出しましたるところ、先刻、御老中よりの御使者みえられ、届書をわざとお取棄てになされ、お立帰りにござりました。かようの訳合いにござりまするれば、肥後守様に対し奉りては申訳の言葉とてなきことながら、上杉家ももはやこれまで、吉良上野介のために断絶と、ご承知おき願わしくござる」
兵部も田中に向き更め、

「田中殿、およそ主君が害され、家来が安閑としているほど嗤うべきことはござらぬ、ただに安閑としているのみか害したる人の陰謀が成就し、家来はその前に屈服し、忠義を誓うに至っては言語道断ではござるまいか。さりとて、国、江戸、双方の血気の者どもが上野介殿お屋敷へ乱入でも致してはお場所柄、申訳のいたしかたがござらぬ」

上野介の屋敷が鍛冶橋内にあるので、兵部がこういうのである。もし、上野介が三十余年後のように本所松坂町にいたら、吉良義央を討ったものは赤穂浪人ではなくして上杉家の米沢浪人であったかも知れない。そういう形勢があるので保科肥後守正之が、天下静穏の手段として、わざと上野介の実子に上杉家を嗣がせ、おもむろに後のはかりごとを施そうとしているのである。しかし、千坂兵部、沢根伊右衛門は、一日たりとも加害者の実子を主君と仰ぐことは、断じて士道にあるまじきことという主張を枉げまいとしている。

兵部は、さらにつづけた。

「かようの訳にござれば、われら両名、三百諸侯の家老中、随一の愚かものと相成るのが望みにござる、よって、せっかくながら両名が手首にかけたる数珠は、肥後守様たりとも御預かり願うわけに相成りかねます」

田中は膝を叩いて首を振り、

「承って至極ごもっともに存じてござる、この上は、ご両所とも、何も忠義、一歩も引かず、存念をご貫徹なさるがよろしゅうござる。つきましては、ここに一ツお話合いがござる、他でもござらぬ。肥後守思案と方々のご思案とは、手で申せば右と左の違い、紙で申せば裏と表でござる。右の手も役に立つが左手でなくてはならぬこともある、紙の表を用いるが世の常ながら裏たりとも用いられるものでござる。そこで、右手と左手とは合わせれば合いまするが、合わせてのみおいては用に立ち申さぬ、紙となると裏表を二枚にして一ツに用いることは、まず以て困難。如何でござろう、なりゆきというものは、必ずしも思い通りに参るものでもなく、又思い通りに参るやも知れませぬものゆえ、なりゆきに任せては。ただし、なりゆきにしたがい、いずれとも定まり次第、とかく申さぬということにはならぬでしょうかな」

「田中殿のお言葉とも覚えず、ちと意味がわかりかねます」

と、伊右衛門がいえば兵部は、

「田中殿こうでござるか。肥後守様は三郎殿をして上杉の名跡を嗣がせらるるようになさる、これが右の手。われわれ両名が家中六千人に代り御家断絶をはかる、これが左の手、と、申さるるのでござるか」

「どちらが右左というではござらぬが、仰せのとおり、肥後守は上杉家を失わせまじとする、貴殿方は上杉家を失うかわり仇敵には望みの物をやらぬという、この二ツのうち、いずれに相成ってもなったとき限り、あとあとの云々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.